



尚阿上人繪詞傳 上



向阿上人繪詞傳序
上人行狀載籍極博而至
其始末則及史闕文識者
憾焉池上西光蘭若上人
終焉之地而深藏斯傳啓
簞見之識者所憾瞭然始

明所謂千載闇室。日至高
頓有餘光者。非邪。假令其
文不詳撰者。畫則古。礪書
則雲竹。鑑識所許。誰云不
然矣。伏惟上人。面受二尊
指揮。撰三部鈔也。與彼證

定。疏異域同轍矣。導師彌
陀化身也。上人何等權迹
哉。諸傳謂上人者。藝州之
男。武田信宗也者。疑矣。何
則。剃度入寂。春秋大異也。
斯傳闕疑。慎言其餘。循循

乎罄焉。可謂良史矣。夫夫覺王之設教也。大藏八萬。而後漢土翻經。最于楞嚴。國朝譯教。魁于三部。楞嚴者。房融所筆。三部者。上人所述。或評以鬼神焉。或贊

以佛說焉。古人云。文者貫道之器也。不深於斯道。有至焉者。不也。良有以哉。今閱斯傳。簡而要。婉而順。能得三部體。事周一代。自非鉅才碩筆。實上人之亞。而

公其世未遠者。烏能至於斯也。是故後世英俊之士。左提右搢。或取之後素。或取之管城。而潤色其鴻業。又可以為三絕矣。然猶不敢公傳之。通邑大都。而藏

之名山。待後識者。深矣哉。松溪義柳和尚者。高仰上人。風獅吼大振。三部指掌。四眾提耳。日課誓受之弟子。六萬餘人。其上足某者。現住西光蘭若。於是師資

相遇。啓其金滕。遂授剖剝。氏於戲天。將假手彼師資。以補上人闕畧。備遐代弘通哉。何其湮古見今耶。頃間和尙來請序於余。余苟住淨華巨剎。則亦無所辭。

矣。矧乎上人挑五代燈藏。往生至要訣於我山。余雖不肖。既業相承其訣。則亦豈可默而止耶。因題數言。冠其篇首。

天明七年丁未夏五月

清淨華院賜紫沙門
仰譽聖道拜首撰



向阿上人繪詞傳刊行乃緣起

向阿上人法之住之海心此道之

向阿上人法之住之海心此道之

向阿上人法之住之海心此道之

向阿上人法之住之海心此道之

向阿上人法之住之海心此道之

彼秘抄を譯説し、有縁乃道俗を勸誘

みそとせ

す。しんくち書し、しんくち書し、

しんくち書し、しんくち書し、諸公の請ひに依りて彼

霊像前にありて帰命を祈り、秘抄を譯説す。お

たしる

る。しんくち書し、しんくち書し、遺跡地と西光を奉ん

り。ゆきあつもの住持とす。しんくち書し、しんくち書し、

つら、不思議の縁より、海より、しんくち書し、しんくち書し、

諸公に詣りて、しんくち書し、しんくち書し、

人々を奉りて、しんくち書し、しんくち書し、

あつ、しんくち書し、しんくち書し、

しんくち書し、しんくち書し、

しんくち書し、しんくち書し、

一、^あ無^い悔^ん入^り世^に出^づ人^は今^も一^は有^り縁^{あり}の^るま^ゝに^は彼^に
 如^い彼^の力^をよ^くに^して^しく^もの^るま^ゝに^は一^は世^に
 り^の深^く思^はれ^るま^ゝに^は指^さし^ゆら^るま^ゝに^は大^に堪^んじ^る
 り^のま^ゝに^は事^に承^り得^し上^人礼^す事^に終^はる^ま
 其^の請^ふ書^を一^紙に^は教^を承^りし^るま^ゝに^は一^はと
 上^人の^如未^だ寤^らぬ^ま

一、^い悔^ん入^り世^に出^づ人^は今^も一^は有^り縁^{あり}の^るま^ゝに^は彼^に
 如^い彼^の力^をよ^くに^して^しく^もの^るま^ゝに^は一^は世^に
 り^の深^く思^はれ^るま^ゝに^は指^さし^ゆら^るま^ゝに^は大^に堪^んじ^る
 り^のま^ゝに^は事^に承^り得^し上^人礼^す事^に終^はる^ま
 其^の請^ふ書^を一^紙に^は教^を承^りし^るま^ゝに^は一^はと
 上^人の^如未^だ寤^らぬ^ま

林欽雲竹法海（ひつせき）の弟子（し）として（し）修行（しゆぎやう）し
 轉（てん）て（て）廣澤（ひろさき）の末（すえ）系（けい）孝源（かうげん）大僧（だそう）と（と）改（か）之（し）を
 附（つ）け（け）て（て）傳（でん）へ（へ）て（て）當（たう）上（じやう）人（にん）と（と）稱（せう）せ（せ）る（る）事（こと）あり
 あら（あ）ら（ら）し（し）き（き）も（も）傳（でん）へ（へ）て（て）し（し）る（る）事（こと）あり
 な（な）ま（ま）り（り）は（は）傳（でん）を（を）傳（でん）へ（へ）て（て）し（し）る（る）事（こと）あり
 世（よ）に（に）傳（でん）へ（へ）て（て）し（し）る（る）事（こと）あり

梓（あづき）の（の）ち（ち）に（に）西（さい）光（こう）庵（あん）の（の）藏（ざう）に（に）て（て）て（て）同（どう）志（し）
 乃（すなは）ち（ち）半（はん）に（に）ま（ま）り（り）て（て）此（こゝ）傳（でん）を（を）據（よ）る（る）粗（は）土（つ）人（にん）あり
 汝（なんぢ）を（を）知（し）り（り）て（て）曰（いは）く（く）人（にん）重（ぢゆう）法（ぽう）に（に）て（て）理（り）へ（へ）て（て）彼（か）
 感（かん）得（とく）の（の）二（に）部（ぶ）に（に）秘（ひ）抄（しやう）及（およ）び（び）て（て）當（たう）時（じ）に（に）つ（つ）く
 ち（ち）に（に）法（ぽう）語（ご）を（を）傳（でん）へ（へ）て（て）し（し）る（る）事（こと）あり
 世（よ）の（の）要（えい）路（ろ）的（てき）な（な）事（こと）を（を）傳（でん）へ（へ）て（て）し（し）る（る）事（こと）あり

願海ありき名海とよめるもの四遠
 一より程をいへん海を縁とよむ
 一夫よ阿保福一とつゝに世をちり
 人よりこのて光明久露輝く
 くく吉水清流をうくくを流
 くるく一向と人海上一流乃家返

そそ正法は燈をうけ邪教の毒海
 一海は海小真をう海内は流布
 一念の念佛の弘通は心よゆきり
 一また東代の偏邪をうくく三部の
 一西州は海一して行者も龜鑑に
 一撥一海くま一はそまの切敷なり

ありてあふまじき妙なるはし見え
 されどもまじきより實徳の光を
 し物を見流しし其は化乃跡
 なるはれはるるもくはるる人
 なるはるるはるる世乃くはるる
 なるはるるはるる粗その

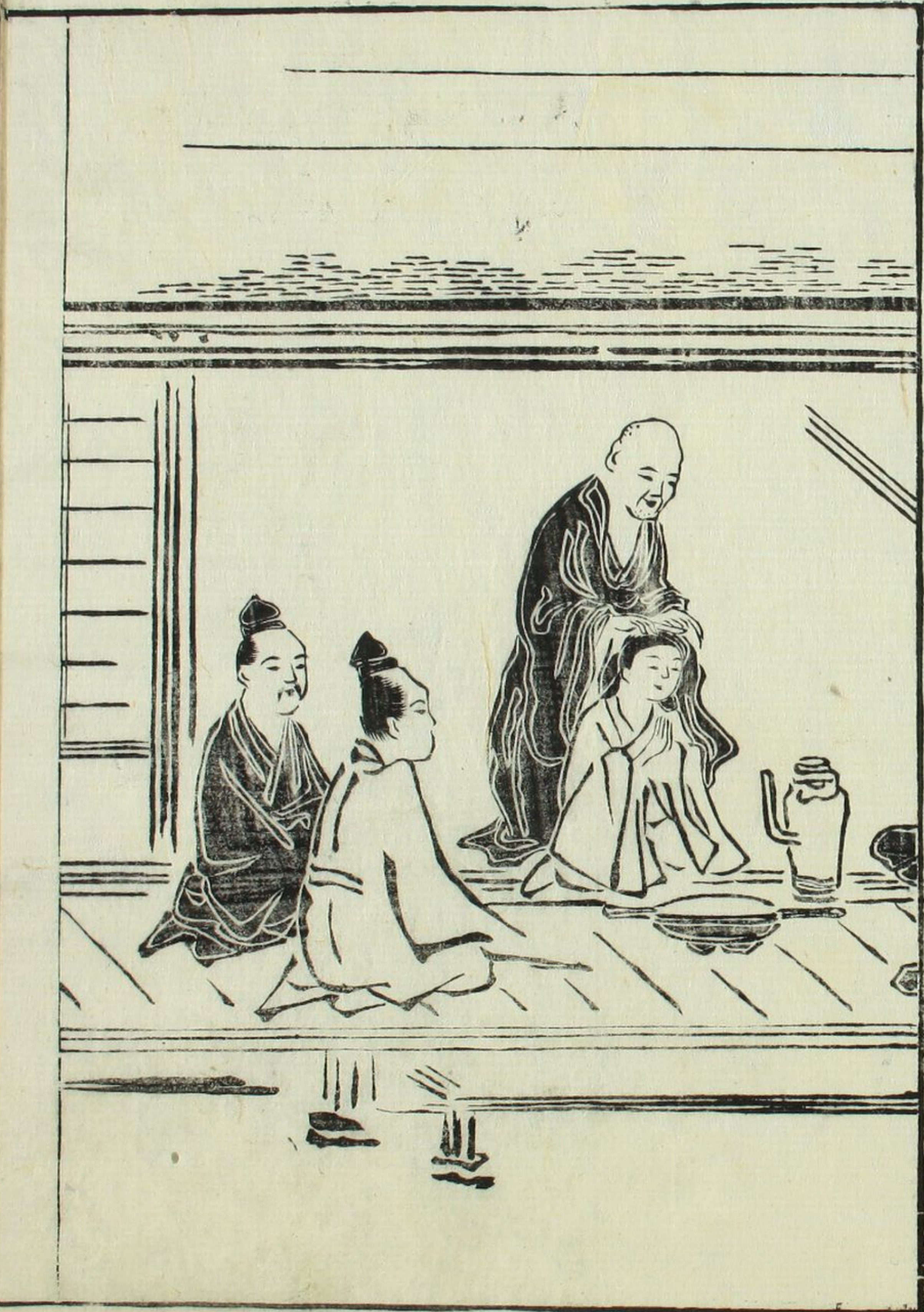
日記なるはるる所聞もはるる
 道徳なるはるる録もはるる也
 なるはるるのはるる居もはるる
 なるはるる信なるはるる
 なるはるる徳圖もあはるる
 なるはるるはるる

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

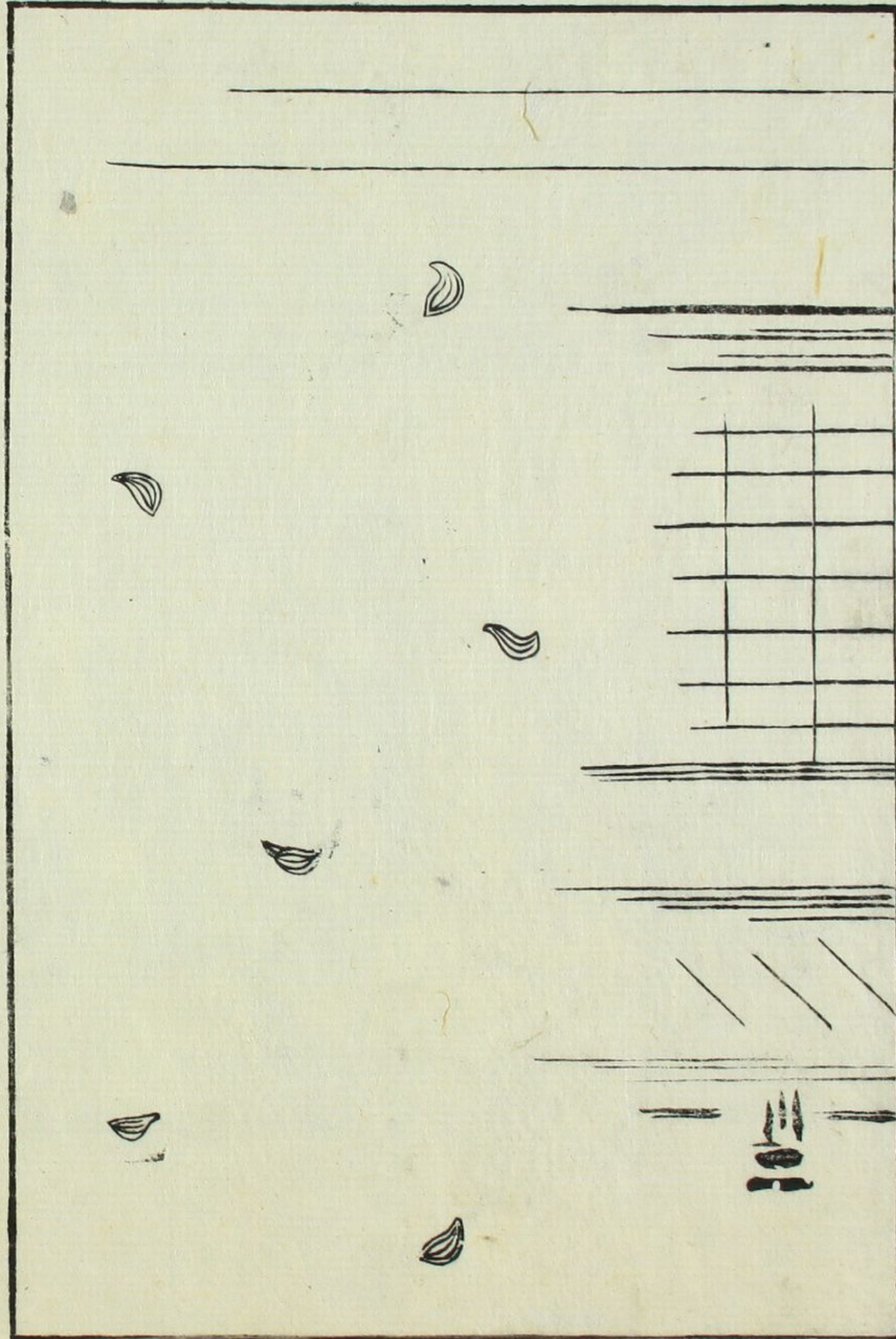
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

法衣を著して天台の教門に入
 大衆戒を授け給ひてあり



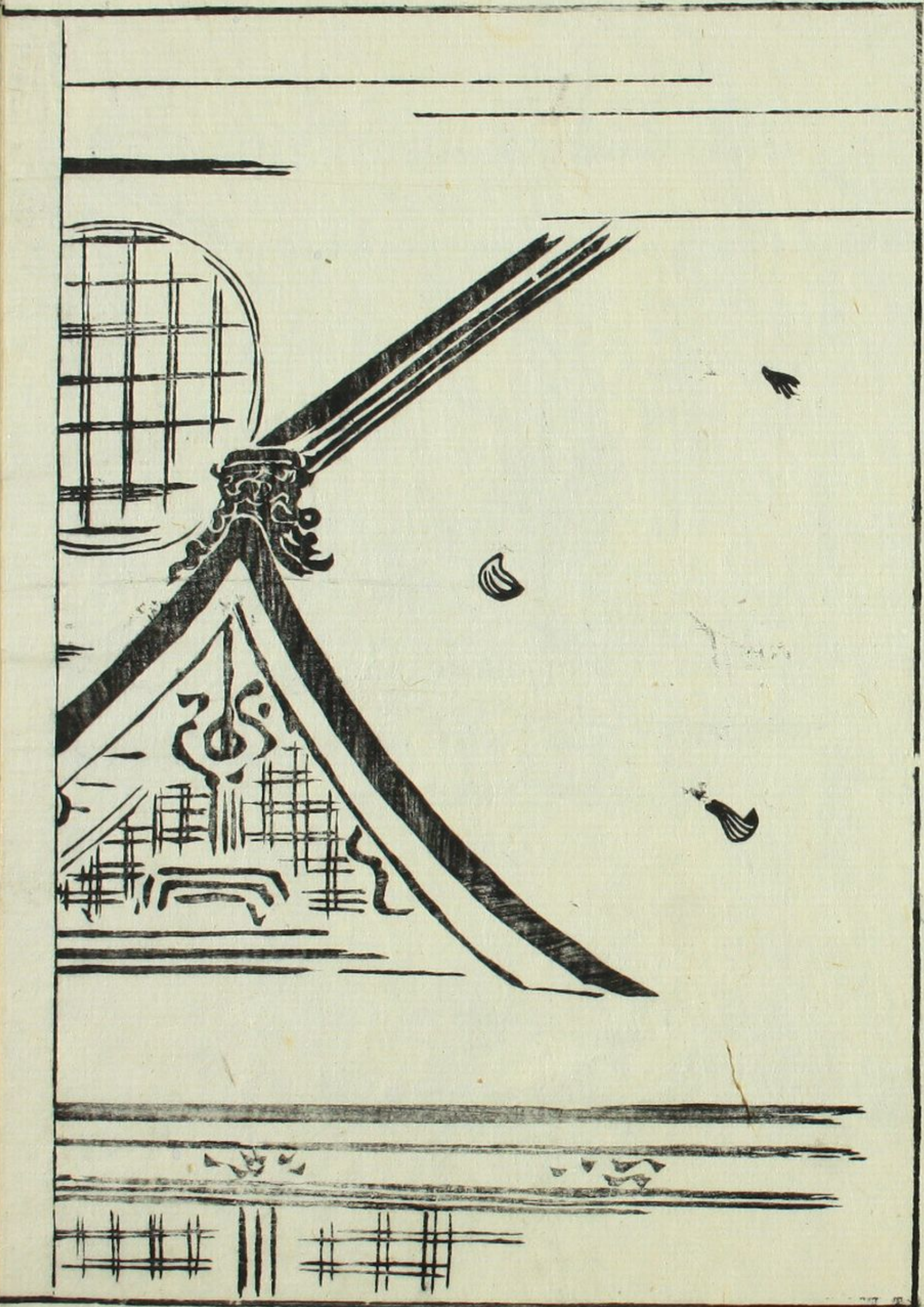


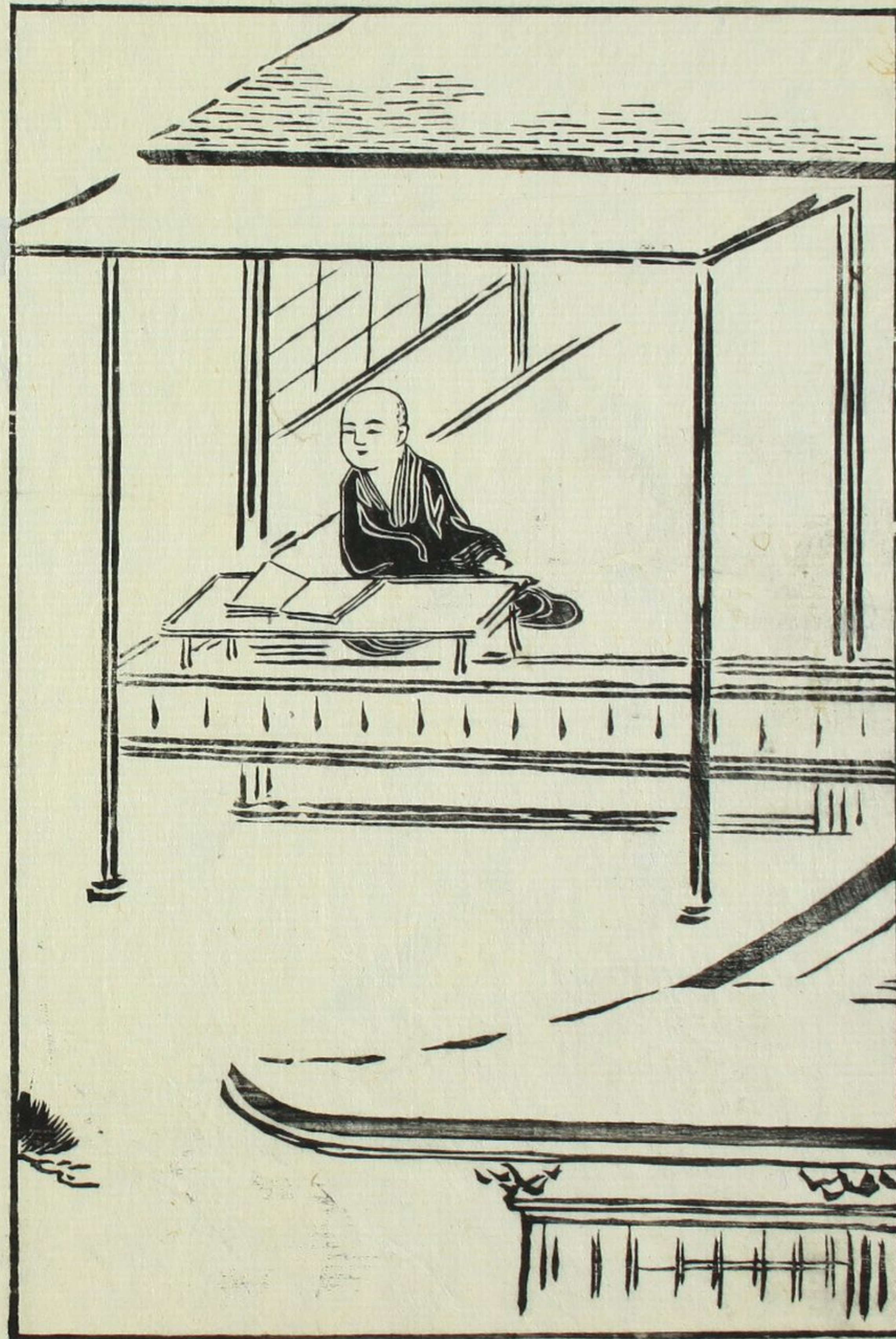
向阿上人傳上



既^すも出家^{あがりけ}の本意^{ほんい}を^いく^く家^いとい^いく^く
 佛法^{ぶつぽう}を^いた^いの^いふ^い通^いり^いと^いく^く圓^{えん}徳^{とく}青^{せい}小^{しょう}
 一^{いつ}台^{たい}教^{きょう}を^い學^{がく}し^い終^{しゆう}ふ^いよ^い甚^{その}性^{しやう}聰^{そう}
 敏^{みん}り^いて^い出^{あがり}群^{ぐん}の^いほ^いゆ^いれ^いあ^いら^いる^いを^いた^い
 意^いの^い裏^{うら}に^い四^し教^{きょう}五^ご時^じの^い廢^{はい}を^い觀^{くわん}望^{ぼう}け^い
 修^{しゆ}練^{れん}の^い本^{ほん}を^い上^{じやう}に^い一^{いつ}心^{しん}三^{さん}觀^{くわん}の^い境^{きやう}を^い智^ち

玉をかんじく餘力より久業の故まかり
 礼拜此道よりまかりとらるるは
 下ゆきまかりとらるるせんせいの
 衆徒をこそとらるる推許しとらるる
 一は頂戴の心とらるる





向阿上人傳上

⑦

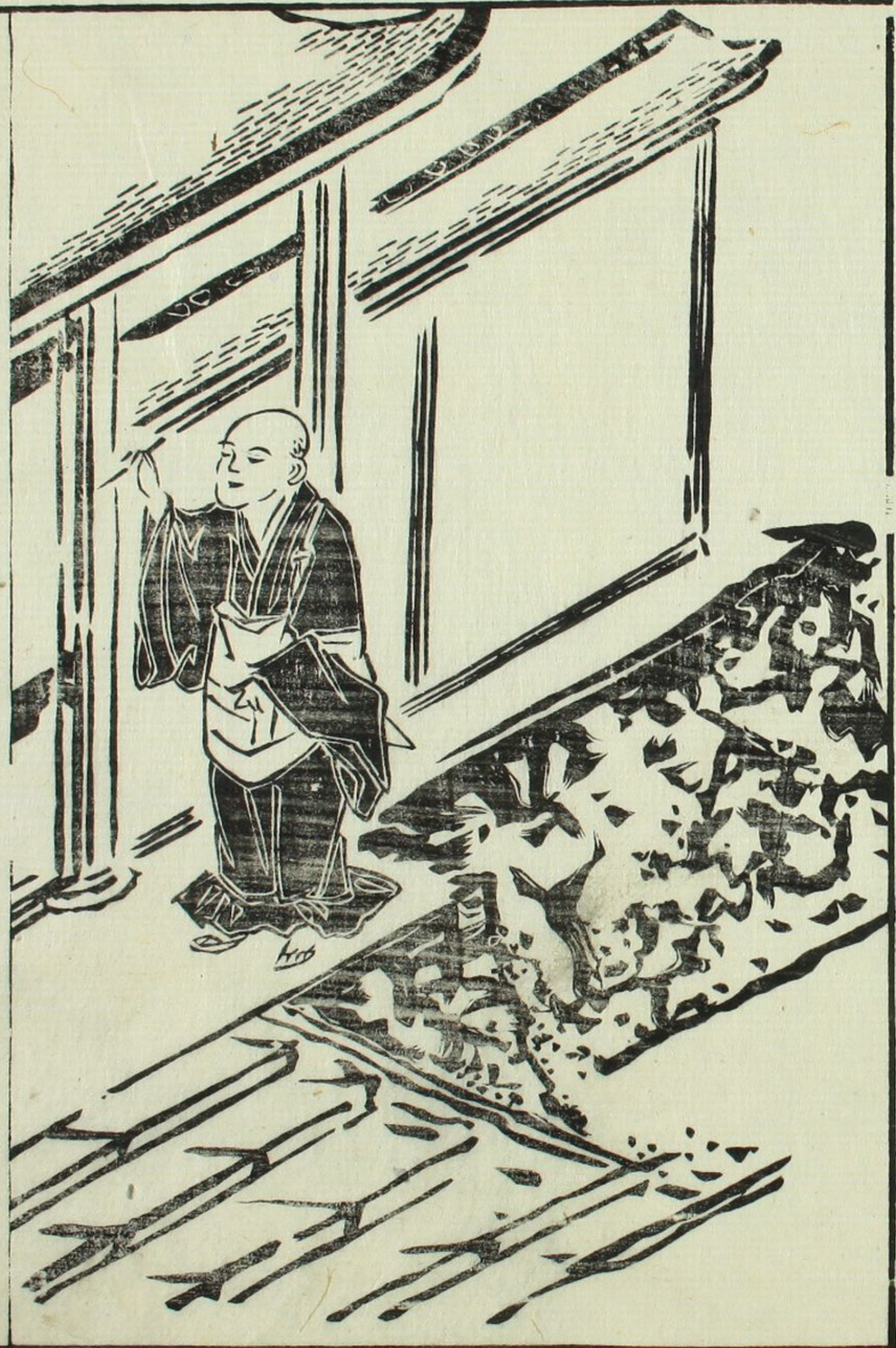


此の寺門乃棟梁とたり衆徒の
 領袖たるといふもなほりこの世に
 ありんばまよふ事なき物ゆへ
 してひろくに浄土の教文を以て
 記志するに西方の資糧を多くし
 給ふ遂に弘安十年高き一子

秋入^り個^ごの鐘^{かね}にうらちうらちと響くうら
 と母^{はは}たうとさうとさうと西^{にし}の坂^{さか}を
 のらぶ都^{みやこ}のこゝ越^こ路^ぢよよ如意^{にぎ}寺^{てら}の
 おふらさしりて歸^{かへ}るは海^{うみ}の音^ねに
 ぬきさしてゆらるよあつたおのちの音^ね
 いまうらうらちうらちと大^{たい}門^{もん}乃^の

夜^より

ばさしきしん夜^よのこゝあはくも母^{はは}
 うらちうらちのこゝ墨^{すみ}は乃^の袖^{そで}
 や一^{ひと}首^{くび}紙^{かみ}書^{かき}をさめてあつて洛^{らく}陽^{やう}
 まいて夜^よ閑^{かん}院^{いん}うらちうらち交^{まじ}衆^{しゆ}の
 夜^よ服^{ふく}ぬあつてあつて洛^{らく}陽^{やう}の墨^{すみ}衣^え

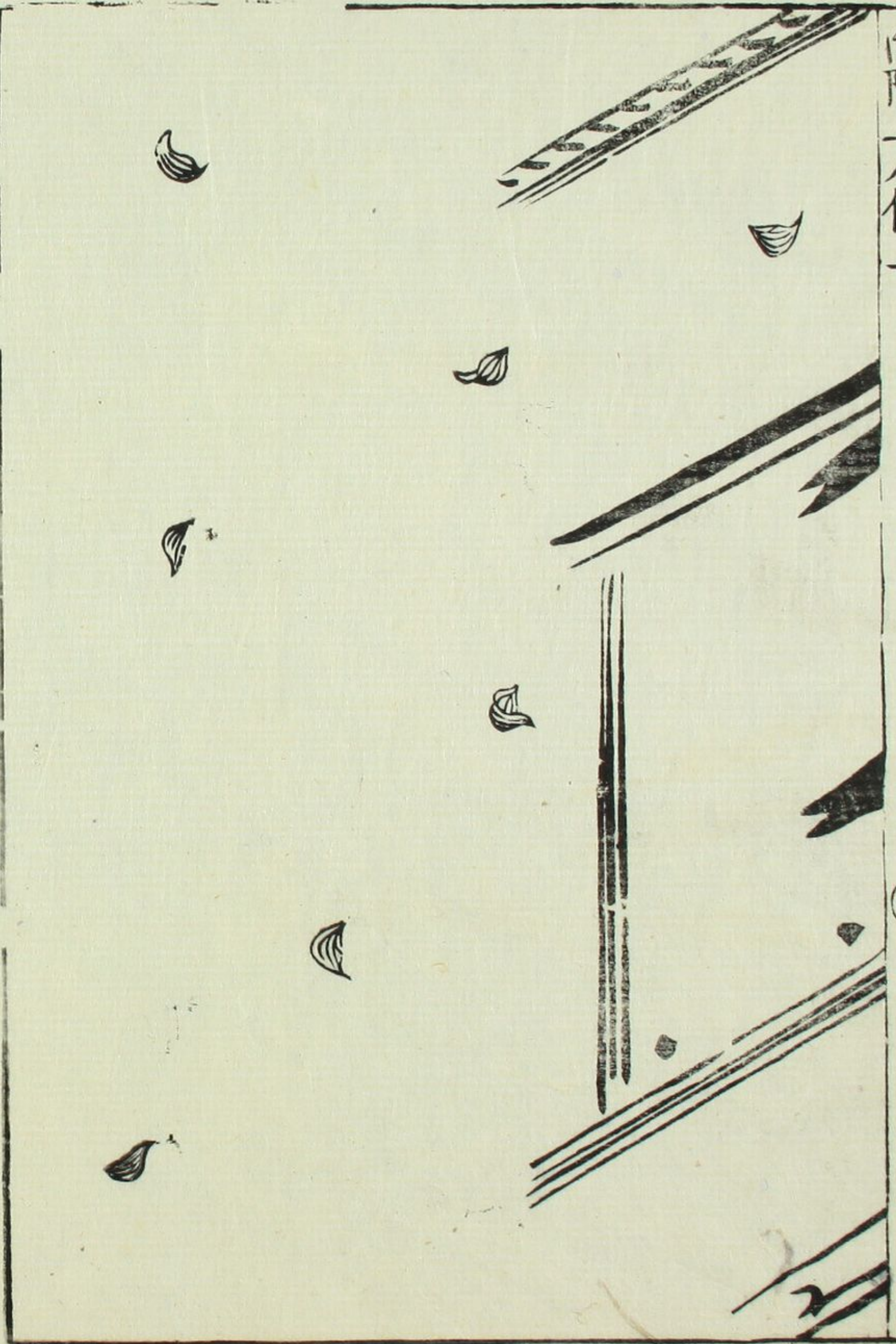


向阿上人傳上



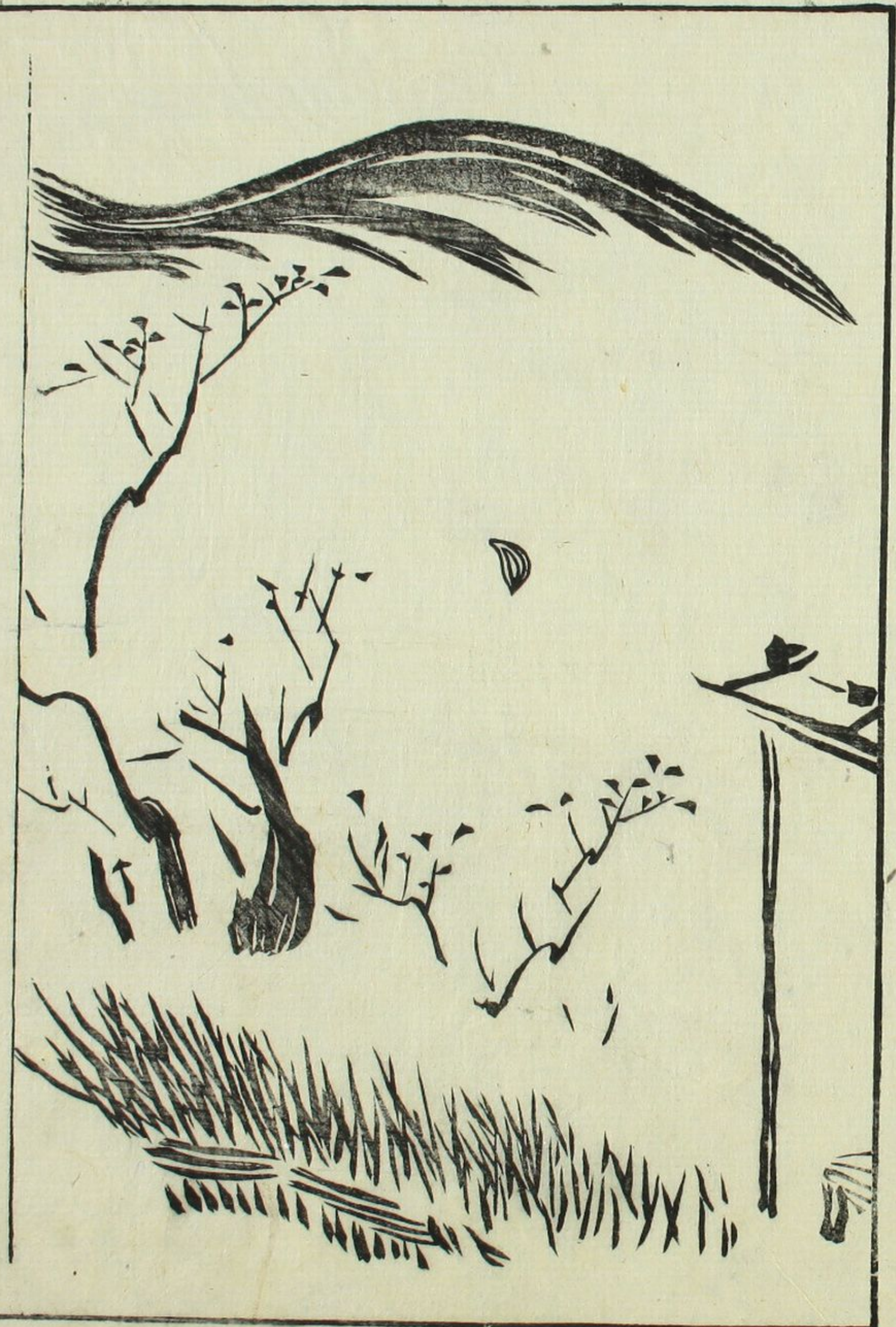
多かりきぬら
 是心こころと改名かへな
 一
 強く里

+



ちりもれい海よまき提乃直路よ
ちり もれい 海 よまき 提 乃 直 路 よ
 まじも九重の外北白川にほろり
まじ も 九 重 の外 北 白 川 に ほ ろ り
 小寂寞乃紫乃飛をく法蓮
小 寂 寞 乃 紫 乃 飛 を く 法 蓮
 上人のすゝを志すひてはるる
上 人 の す ゝ を 志 す ひ て は る る
 念佛とらぬいりし宇智紫
念 佛 と ら ぬ い り し 宇 智 紫

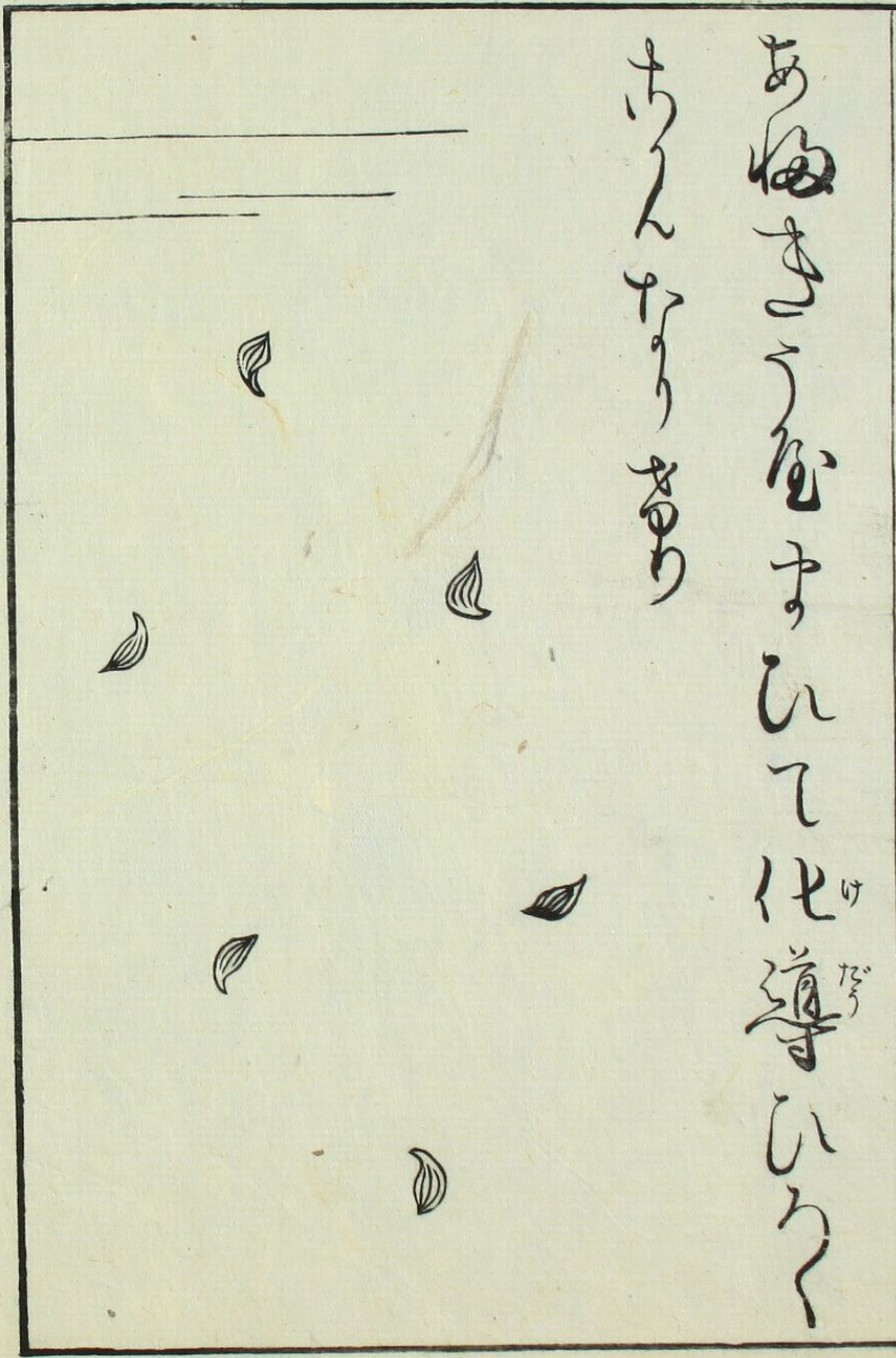






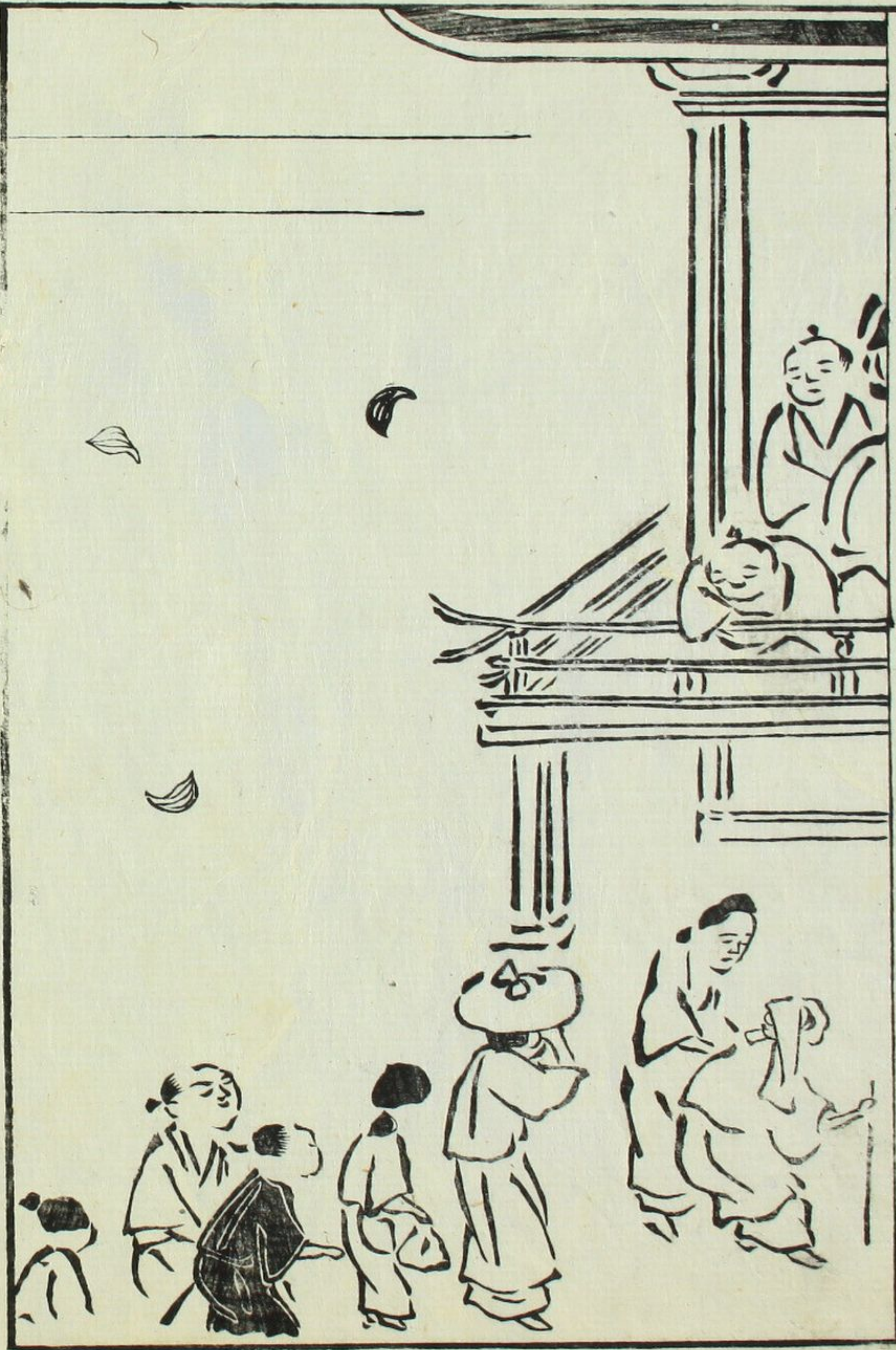
其^{その}後^{のち}吉^よ水^{みづ}乃^の法^{ほふ}流^{りゅう}を志^しして
 禮^{らい}阿^あ和^わ尚^{しょう}乃^の福^{ふく}一^{いつ}に^にほ^ほれ^れく^く宗^{そう}脈^{まく}を
 う^うげ^げく^く向^む阿^あと^と人^{にん}と^と号^{ごう}し^し清^{せい}淨^{じやう}花^け院^{えん}よ
 住^{ぢゆう}し^して^て其^{その}甚^{しん}義^ぎを^をひ^ひら^らめ^め給^{たま}ふ^ふ玄^{げん}真^{しん}
 聖^{せい}阿^あ圓^{えん}宗^{そう}乃^の一^{いつ}に^にし^しと^と人^{にん}を^をみ^みた^た
 下^げにあ^あり^りと^と入^いて^て洛^{らく}中^{ちゆう}乃^の貴^き賤^{せん}

あゆまじうなすして化導けだういらく
ちんちんちんちん





向阿上人傳上



月ツキふししううちちああははななよよ風かぜああるるたたららん
まてまてまてま法ほうままるるにに流ながるるままるるままるるままるる
ままま師しななまま排はい袖そでししるるままるるままるるままるるままるる
 無む智ちのの道どう俗ぞくをを尚たうととししてていいくくままるるままるる
ごせせはは又また名な地ち鏡かがみ小こ世せ神かみのの世よにに五ご代だい
 相あ傳でん乃の心こころ脈みやくをを志しすす一い往わう生じやう至し要やう訣けつ

とつらりせしと上足あきの玄真上人あきあり
 孝治あきの時あき延慶二年卯月五日あき
 其後あき正和五年正月十一日あき
 て圓家あきの書あき見あきの要訣あきの法あき
 元弘元年あき霜月廿九日聖阿あきのあき
 了あきつげあきの親筆あきの本淨花院

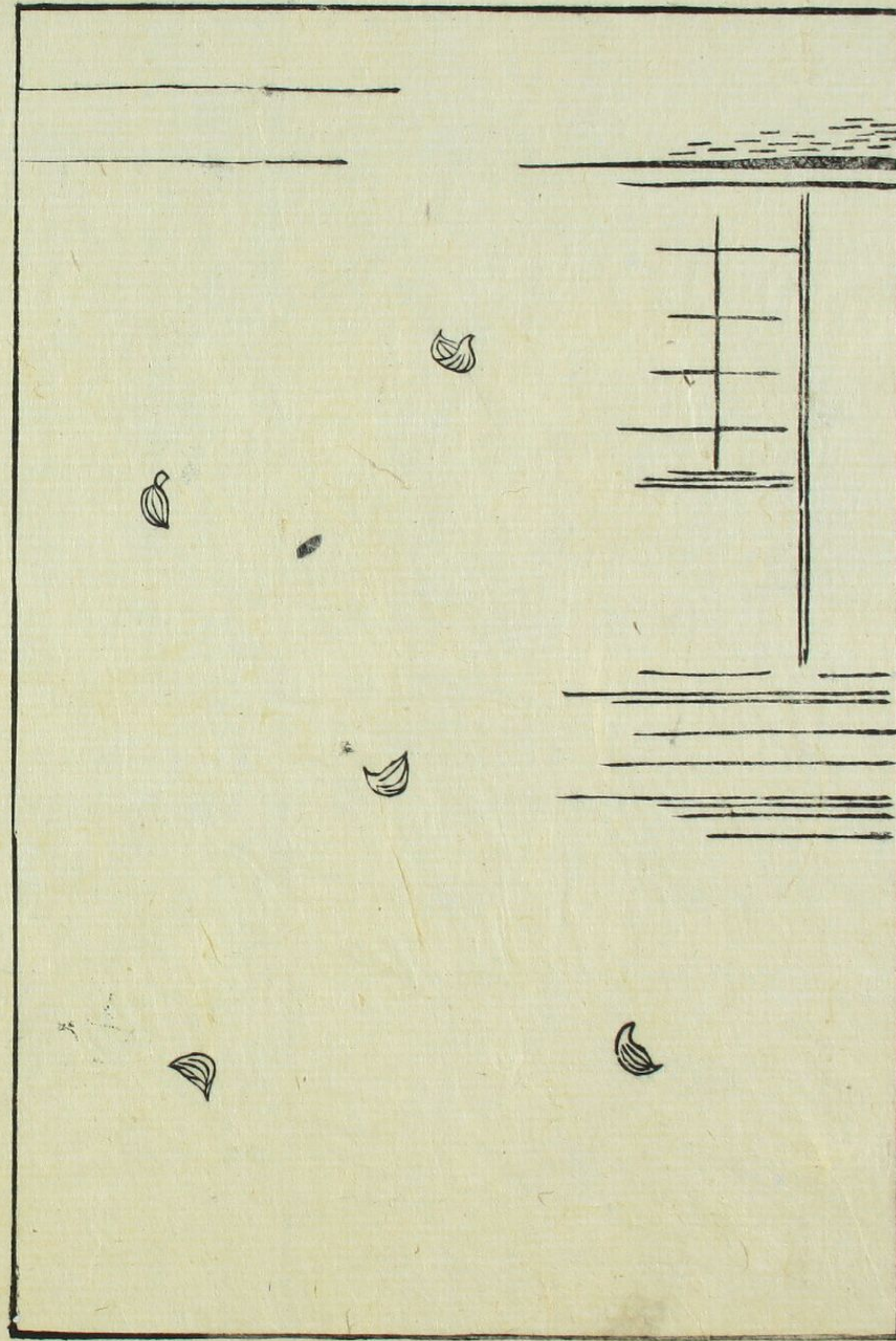
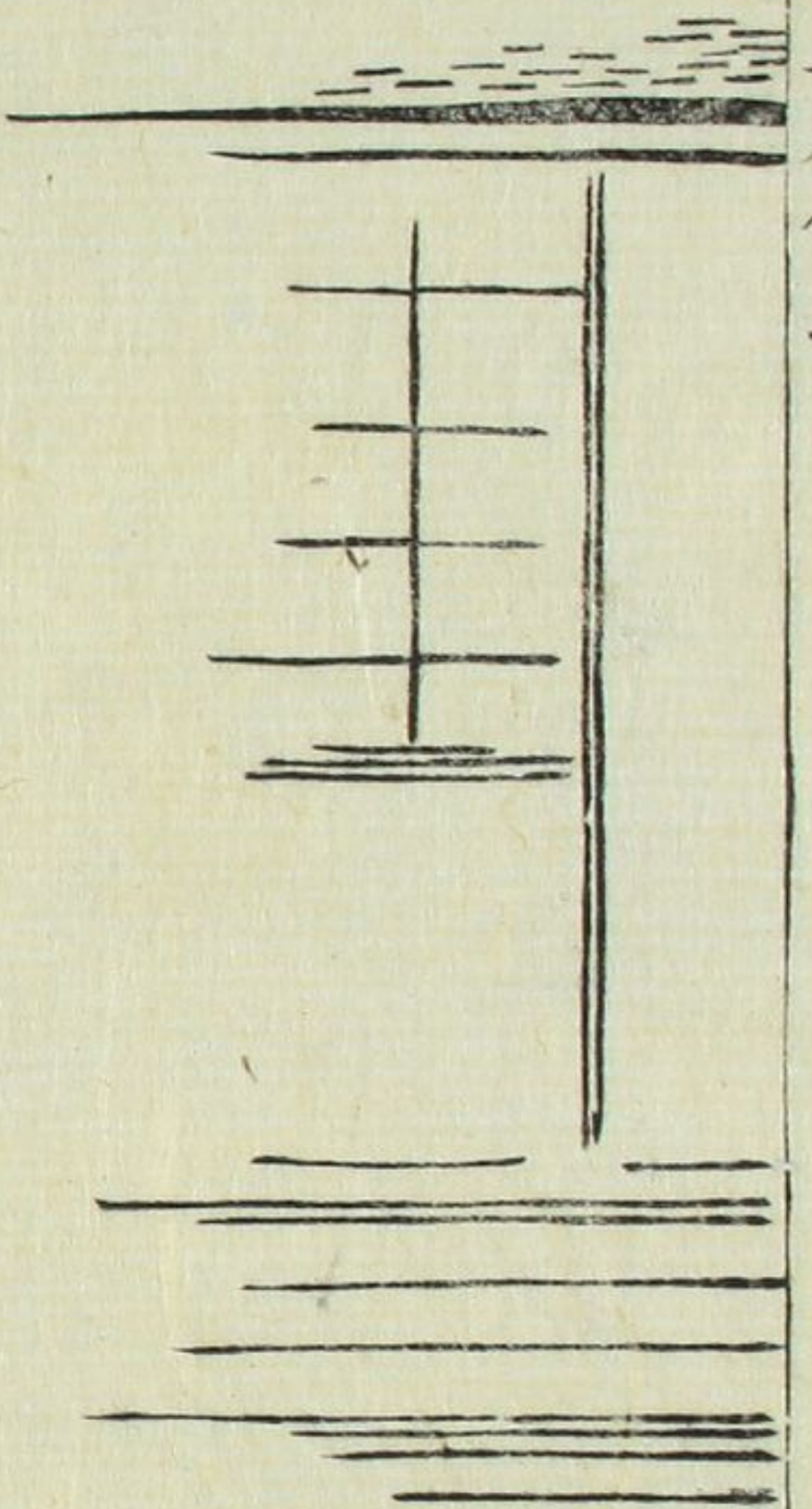
了あきあかあき上人あき乃新あきの母あき
 了あきの筆あきの道あき鏡あきなり





大





元亨^{げんこう}流^{りゅう}之^の入^{いり}浄^{じよう}出^{しゆつ}門^{もん}乃^の餘^よ流^{りゅう}を^をりて

其^{その}を^をあ^あら^らわ^わす^すに^にあ^あら^らわ^わす^すに^にあ^あら^らわ^わす^す

た^たま^まに^にあ^あら^らわ^わす^すに^にあ^あら^らわ^わす^す

ふ^ふか^かし^しの^のう^うみ^みに^にあ^あら^らわ^わす^す

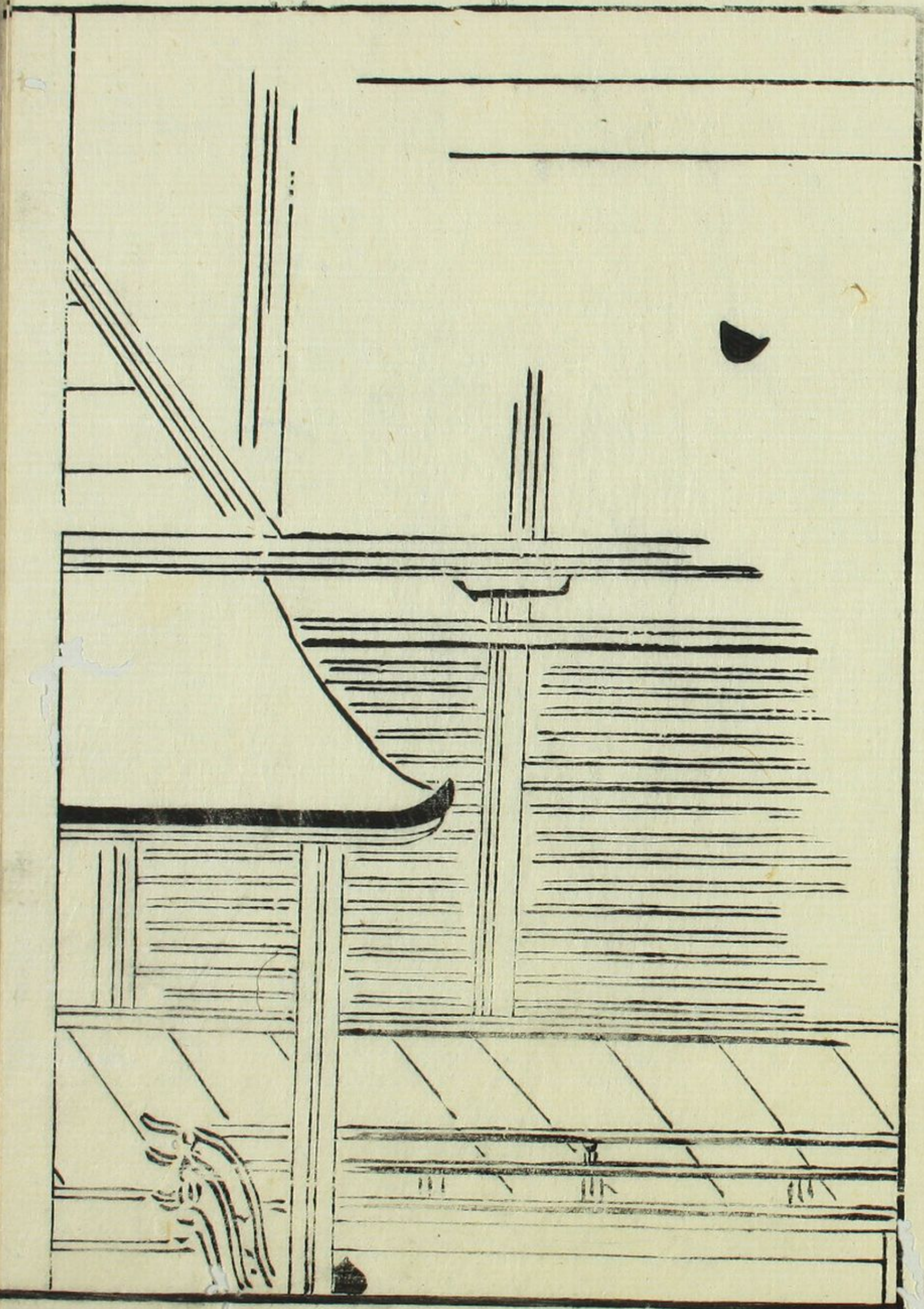
た^たま^まに^にあ^あら^らわ^わす^すに^にあ^あら^らわ^わす^す

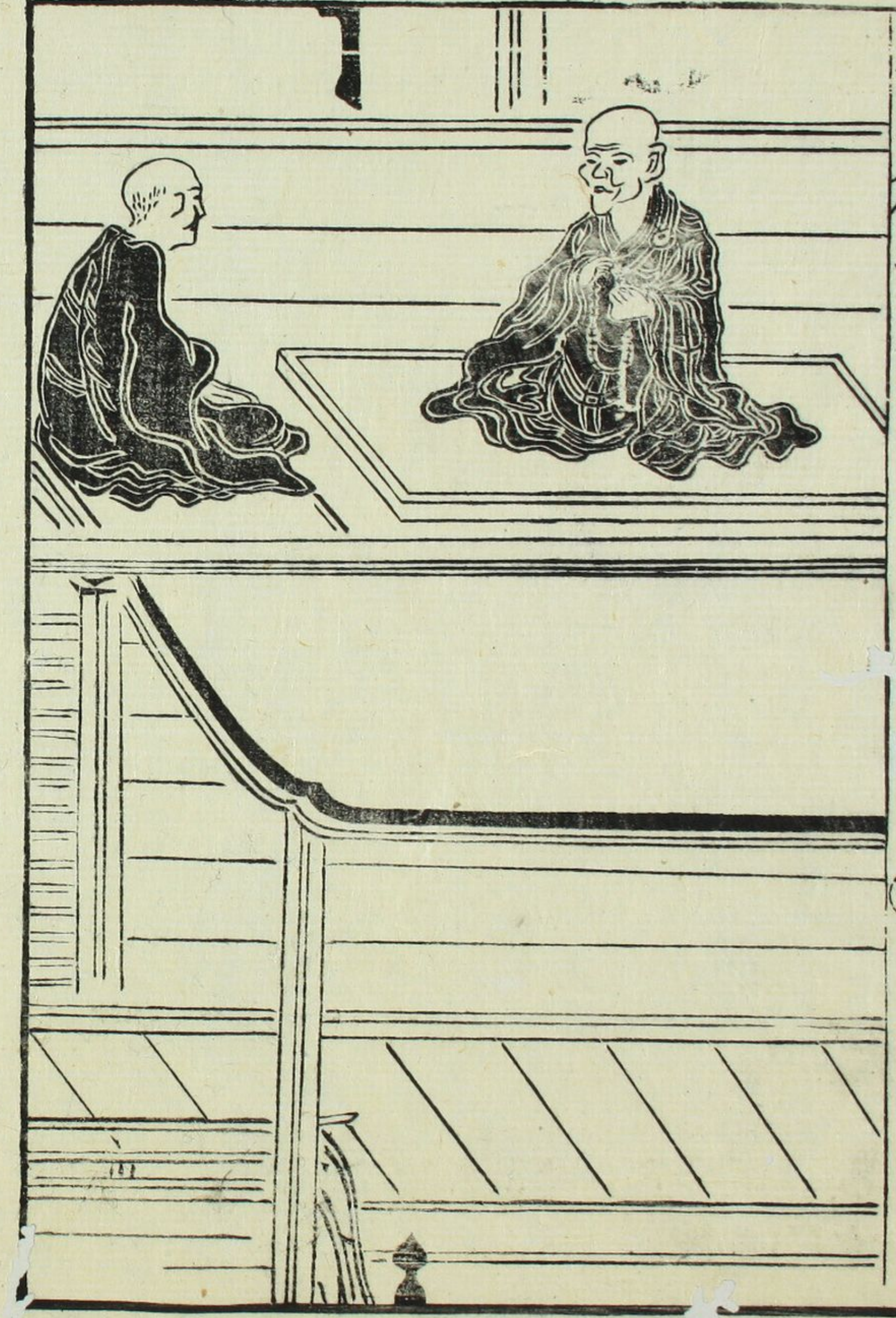
ま^まろ^ろの^のう^うみ^みに^にあ^あら^らわ^わす^すに^にあ^あら^らわ^わす^す

此後從まかりしあきまはしむる事ありし
 事なれども今つれありて
 條せんぢうのありしせんぢうかきしせんぢうに
 入ちんせんぢうてせんぢうし
 舞道みまうをみまうしみまうしみまうしみまう
 弥み隨ぞ感かん應おう乃日なひたたししここてて

真如堂より南よてつ通夜つや一い夜
 正ま月げつちえちえ風かぜよくてよ小こ夜よまま
 くま更さ行ゆああててししまままままままま
 ちち志しけけいいふふ念ねん講こう一い夜よまままままま
 まままままままままままままままままままま
 てあ物ぶ語ごとと一い人にんまままままままままま

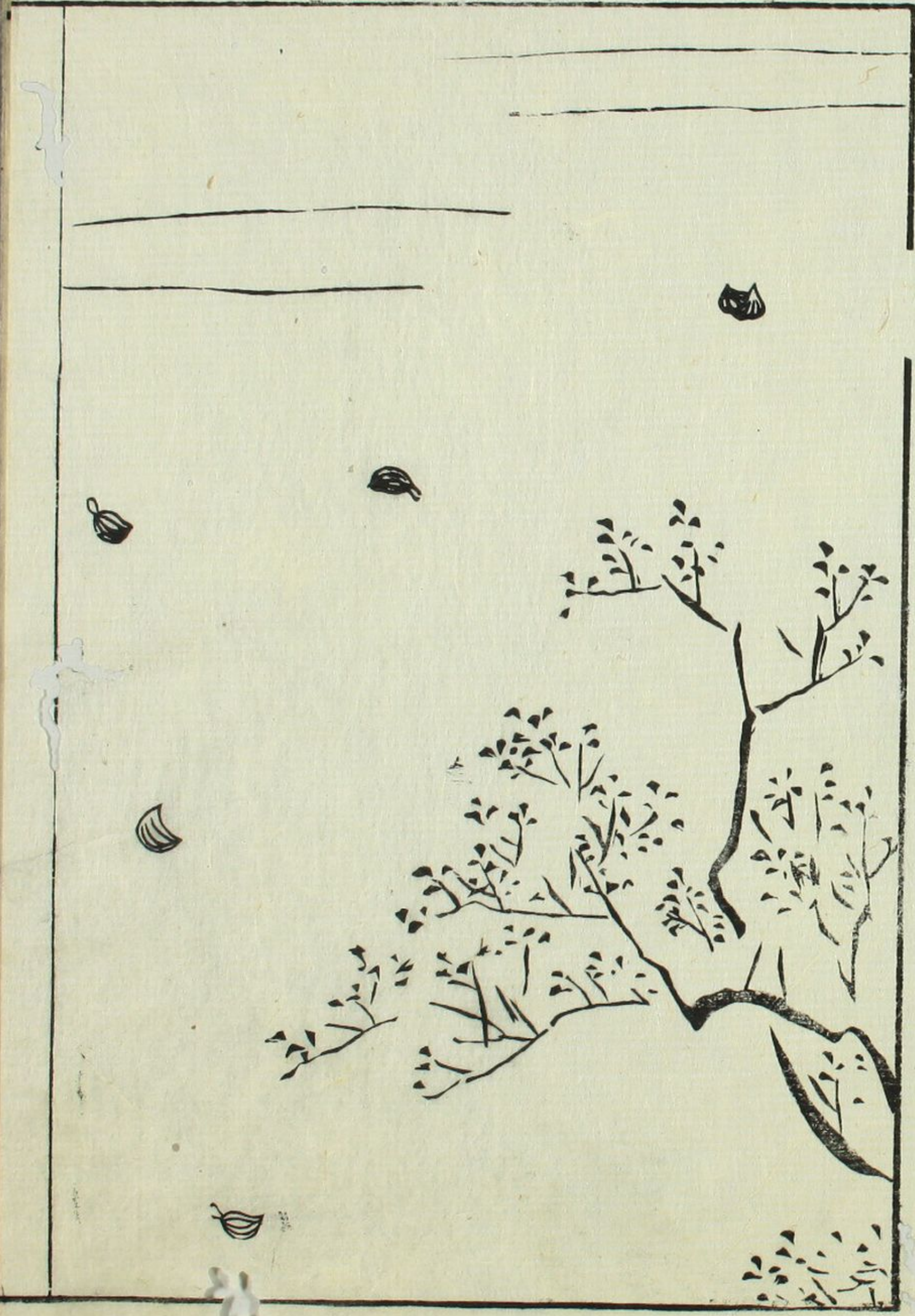
せりしもさへいひておのづから
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては
 ちよきほひのふりかへりては





白上人傳上

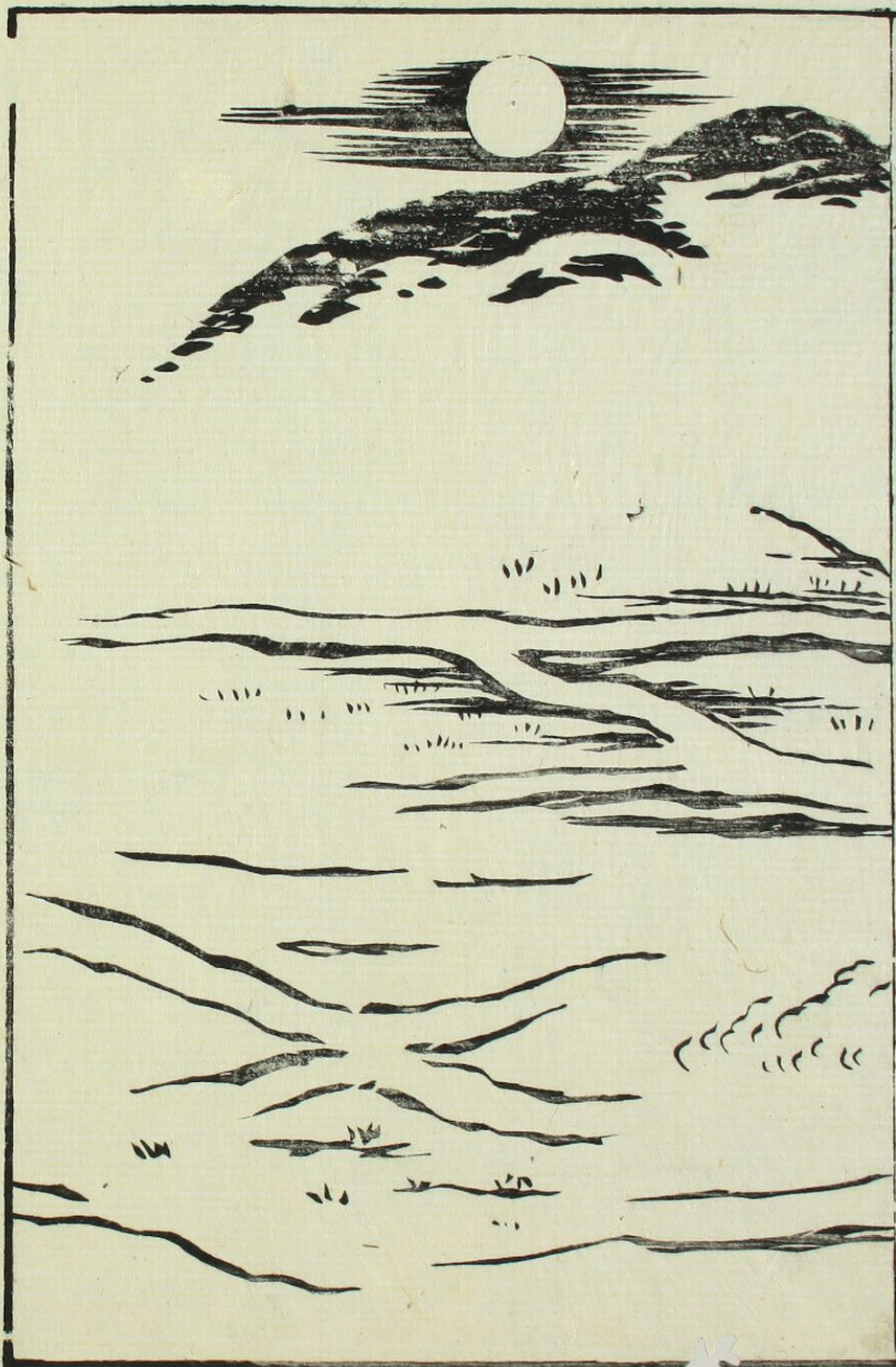
世





向阿三傳上

九四



何れも一を居よして何事かを悟
 らずとゆふしやうへんをさうとそら
 念佛乃法心そんごんりて年ねん素そたふ審しん
 ちうとくはくはるるぬたつと戒かいふふ二ふ尊そん乃
 化け現げんちうてりてひええてき悲ひ花きらを
 くちうもこのくてもあまの夜を居

あらんとはは家には二僧あり
 退出たいしゅつし給ふるは行末ゆきすえを志しん
 ずんばに上人じゆんぱんもさあへ見みしむるは
 一山いつさんありしの霧きり通とほるをさうして見
 へ給ふなりたまは

向阿上人傳卷上

